

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653267

研究課題名(和文)「学士力」を客観的に査定するルーブリックの研究開発

研究課題名(英文) A Study of the Preliminary Development of Rubric to Assess "Gakushiryoku"

研究代表者

川嶋 太津夫 (KAWASHIMA, TATSUO)

大阪大学・未来戦略機構・教授

研究者番号：20177679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000 円、(間接経費) 720,000 円

研究成果の概要(和文)：2008年に中央教育審議会からだされた答申「学士課程教育の構築に向けて」では、我が国の学士課程教育(学部教育)において、分野共通に育成すべき学習成果として「学士力(知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、創造的思考力)」が提言された。一方、近年益々、大学教育の質保証とその基盤となる厳格な成績評価への要望が強くなっている。そのような状況において、知識・理解については従来のテスト(試験)で達成度を評価できるものの、汎用的技能や態度・志向性、創造的思考力などについての厳正かつ客観的な評価(アセスメント)に資するいくつかのルーブリックを AACU の VALUE Rubric 等を参考に、試行的に開発した。

研究成果の概要(英文)：In 2008, National Council for Education published the policy paper "Toward the Construction of Undergraduate Program", in which it proposed "Graduate Attribute(Gakushiryoku)" as the common learning outcomes across majors. This common graduate attributes consist of knowledge and understanding, generic skills including communication skills and team work, values and attitudes, and creative thinking. However, how to measure and assess is still questionable. This study has explore to develop rubrics to measure and assess some of learning outcomes referring the VALUE Rubrics developed by Association of American Colleges and Universities. But more efforts are needed to apply to diverse higher education in Japan.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：学士力 アセスメント ルーブリック 質保証 ラーニング・アウトカム

1. 研究開始当初の背景

我が国は欧米に遅れること20年、現在高等教育のパラダイム展開の時を迎えている。「教育パラダイム」から「学習パラダイム」への移行である。教員が「何を教えたのか」ではなく、学生が「何ができるようになったのか」という「学習成果」を重視する枠組みである。日本では、2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」で参考指針として示された「学士力」がパラダイム転換の契機となった。

「学士力」の主要な学習成果

1. 知識・理解(分科, 社会, 自然等)
2. 汎用的技能(コミュニケーションスキル, 数量的スキル, 問題解決能力等)
3. 態度・志向性(自己管理能力, チームワーク, 倫理観, 社会的責任等)
4. 総合的な学習経験と創造的思考力

また大学(院)設置基準の改正に伴い, 大学は育成すべき人材像と, 卒業(修了)までに修得させる知識や能力を「学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)」として明示することとなった。

多くの大学は, 参考指針としての「学士力」や経済産業省が提案した「社会人基礎力」(3つの力・12の能力要素)などを参考にしつつ, 卒業(修了)までに獲得を目指す「学習成果」の設定に取り組んでいる。

「社会人基礎力」の主な能力要素

1. 前に踏み出す力
 - ・主体性
 - ・働きかけ力
 - ・実行力
2. 考えぬく力
 - ・課題発見力
 - ・計画力
 - ・創造力
3. チームで働く力
 - ・発信力
 - ・傾聴力
 - ・柔軟性
 - ・状況把握力
 - ・規律性
 - ・ストレスコントロール力

しかし, 「学士力」「社会人基礎力」はともに学習成果として「できる」とは表現されているが, 「どこまで出来れば」学士の水準に達しているのかという「到達水準」までは示していない。800近くの大学が存在し, 極めて多様化した我が国の高等教育ではあるが, 「学士」という同一の学位を授与する限りは, ある程度共通の達成水準を代表的な学習成果について設定する必要がある。欧州では「高等教育資格枠組」が設定され, 学位(学士, 修士, 博士, 専門職学位)の主要な学習成果について到達段階が設定されて

いる。また米国でも民間財団からの援助を受けて開発中であり, Association of American College and Universities(AACU)が, 「重要な学習成果(Essential Learning Outcomes)」について詳細な「到達度判定基準表 VALUE Rubrics(Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education)」を各大学の協働作業をと通じて開発した(科学研究費補助金(基盤研究C)「高等教育のラーニング・アウトカムズ及びそのアセスメント手法に関する研究」研究代表者: 川嶋 太津夫)。そこで, 我が国でも, 代表的な学習成果について, 客観的な「到達度判定基準表 Rubric」を開発し, 運用する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では, 2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」で参考指針として示された「学士力」のいくつかの学習成果について, その達成状況を客観的に測定・評価できる「到達度判定基準表 Rubric」を試行的に開発することを目指す。

学習指導要領により共通の教育内容が存在し, また全人教育の観点から知識・理解のみならず, 意欲・関心・態度や行動についても観点別評価としてこれまでアセスメント(査定)を実践してきた初等中等教育と異なり, 大学教育では, 教育内容は個々の教員の専門性に任せられ, また成績評価も専門分野における知識の理解度を中心として筆記試験・レポートにより行われてきた。その上, 成績評価基準も各教員の裁量に任せられ, その評価基準も学生や同僚教員に開示されることなく「個人的」に実施されてきた。

これまでの成績評価方式では「優」の評価を受けた学生は, 何を理解し, 何ができるようになったから「優」なのか。「良」の評価を受けた学生は, 何がどこまでできなかったために「優」ではなく「良」なのかが全く不明である。これでは, 学生の学習の向上に全く役立たないし, 教員の成績に対する説明責任も全く果たされていない。

さらに「学士力」(及び「社会人基礎力」)で提示されている「汎用的技能 Generic Skills」や「態度・志向性」といった, 学習成果については, 日常的に児童・生徒と接触している小中学校教員とは異なり, 大学教員はせいぜい週に1~2階程度の接触にとどまることから, いわゆる「観点別評価」は現実的にはほぼ不可能な状況下にある。

週に1回の授業のみで学生と教員が接触するという日本の大学固有の文脈のもとで, 汎用的技能を育成し, 態度・志向性を涵養するためには「カリキュラム・マップ」等を活用して, 組織的に教育に取り組むことが最低限の前提である。

さらに, 学習成果の到達度の測定や評価については, 知識・理解の分野以外の汎用的技能や意欲・態度・関心の領域については, 新たに開発する必要がある。

したがって, 学習のアセスメントや評価に

ついて、少なくとも日本の高等教育の世界では、その必要性も認識されないまま、研究分野としても未開発のままであった。

そこで、本研究は従来我が国の高等教育研究分野には存在しなかった学習測定・学習評価 (Measurement and Assessment of Higher Learning) の分野、いわば「高等教育評価論」という未確立の研究・実践分野の確立を目指し、その研究の第一歩となるものことを目指した。

3. 研究の方法

各種関連出版物、論文等のレビューに加えて、我が国の高等教育の国際的通用性を考慮して、国内のみならず海外の大学、高等教育関連団体のウェブを予備的に調査し、これによって入手した情報をもとに優れた取組を行っている大学、関連学会等を訪問し、調査を行う。これらの調査によって得たいくつかのルーブリックを参考にしながら、学士力等で示された主要な学習成果の「到達度判定基準表」を作成した。

4. 研究成果

「学位」の持つ国際的通用性を考慮すれば、我が国の大学が授与する学位（学士、修士、博士、専門職学位）は、国際的に同等な学習成果の内容・水準でなければならない。そこで、この分野で我が国の先を行く米国の先進大学での取組を調査するため、AACU が毎年開催する General Education and Assessment 大会、Association for the Assessment of Learning in Higher Education 主催の年次大会、Association of Institutional Research 主催の AIR Forum 等に参加し、米国の大学におけるアセスメントの現状、特にルーブリックの開発及び活用状況について有益な知見を得た。また、SAT、GRE などの標準テストの開発、実施を通じて学習のアセスメントに長年の経験と知見を有する College Board を訪れ、アセスメント、ルーブリック開発の際に留意すべき点について示唆を得た。それによると、必ずしも多く大学でルーブリックがすべての授業で導入されているわけではないが、州立大学を中心に、少なくとも学内での議論は行われていることが分かった。

翻って我が国では徐々にルーブリックに注目が集まっているが、その作成過程の困難さには必ずしも理解が及んでいないようである。

しかし、2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（以降、「質的転換答申）」において、従来の教員主体の授業方法ではなくて、学生が能動的に学習に参加できる双方向的な授業スタイルやアクティブ・ラーニングを取り入れた授業への転換、生涯自らが学び続ける主体的な学習者を育成するためには、授業外の自主的な学習時間を大幅に増加させる必要性・重要性が指摘さ

れた。また、教育への組織的取組の一環として、全学的な「アセスメント・ポリシー」が初めて指摘されたことにより、急激にアセスメントとそのツールの一つであるルーブリックへの関心が高まった。このようにして、本研究を取り巻く情勢は、一気に変化し、いくつかの大学において個別にルーブリックの開発、運用が動き出した。

本研究では、AACU の VALUE Rubrics を参考にしながら「学士力」で示された学習成果のうち、コミュニケーションスキル、チームワーク、論理的思考力について、海外の事例を参考にしながら、「不合格レベル」「合格レベル」「優れたレベル」「卓説したレベル」の4段階からなる、いわば原基的な「到達度判定基準表」を開発した。しかし、今回は、各大学での実際の授業等への適用までに至らなかった。引き続き実践性を高めていく必要がある。

「質的転換答申」以降、急激に普及し始めたアセスメントとそのツールの一つであるルーブリックの研究開発に、本研究が少なからずの貢献が期待される。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 1 件)

濱名篤・川嶋太津夫・山田礼子・小笠原正明編『大学改革を成功に導くキー・ワード30「大学冬の時代」を生き抜くために』学事出版 2013年・219頁

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川嶋 太津夫 (KAWASHIMA TATSUO)

大阪大学・未来戦略機構・教授

研究者番号：20177679

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：